

2023 年度事業報告書 附属明細書

附属明細書 1 会員一覧

附属明細書 2 主催セミナーに関する事項

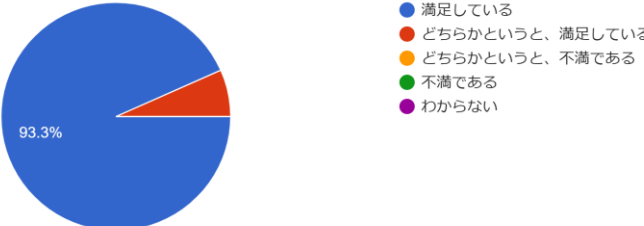
附属明細書 3 留学生会館入居状況

会員一覧

2024 年 3 月 31 日現在

正協力会員名称			
1	東京工業大学	24	日本女子大学
2	東京外国語大学	25	法政大学
3	東京学芸大学	26	明星大学
4	東京農工大学	27	立教大学
5	お茶の水女子大学	28	早稲田大学
6	電気通信大学	29	東洋英和女学院大学
7	一橋大学	準協力会員名称	
8	東京都立大学	30	東京工業高等専門学校
9	青山学院大学	31	白梅学園短期大学
10	桜美林大学	賛助会員名称	
11	大妻女子大学	32	(株)幼体連スポーツクラブ
12	慶應義塾大学	33	(株)スリーボンド
13	工学院大学	34	安藤物産(株)
14	国際基督教大学	35	多摩信用金庫
15	駒澤大学	36	大成建設(株)
16	芝浦工業大学	37	相羽建設(株)
17	上智大学	38	第一屋製パン(株)
18	創価大学	39	ハウスコム(株)
19	中央大学	40	(一社)ジャパンケネルクラブ 川崎ユース犬友クラブ
20	帝京大学	41	一般社団法人 DOCOMOMO Japan
21	東京工科大学	42	一般社団法人参加型社会学会
22	東京都市大学	43	(株)ビクセン
23	東洋大学		

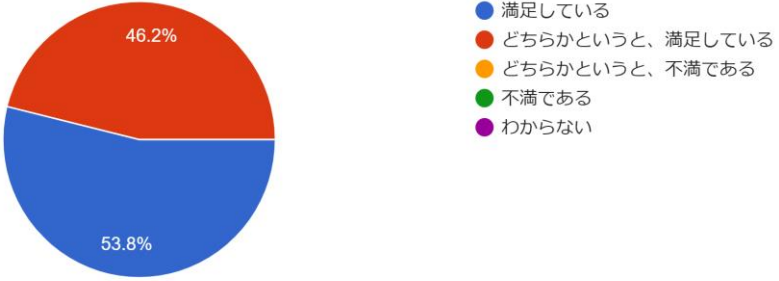
2023 年度事業報告 附属明細書2 主催セミナーに関する事項

事業名	第 13 回新任教員研修セミナー(オンデマンド講義+オンラインセミナー+合宿セミナー)
期 日	オンラインセミナー2023 年 8 月 20 日(日)、合宿セミナー8 月 28(月)~29(火)1 泊 2 日
主 題	拡張されたアクティブ・ラーニングと未来の学び
対 象	教職員
趣 旨	<p>新型コロナウイルス感染症の法的位置付けの 5 類へと引き下げが近づきました。しかし、それに先立って、大学の授業はすでに以前の姿に戻りつつあるようです。教室での対面の授業に見られる学生たちの活気に、大きな喜びを感じる大学教員は少なくないと思われます。しかし、「以前の姿に戻る」だけでは、あまりにももったいないというのもまた否定し難い事実です。コロナ禍期間中に利用を余儀なくされた IT を活用した学びと、対面でしか実現困難な学びを、適切かつ効果的に組み合わせる学習が可能になったからです。</p> <p>コロナ禍以前には、たとえば、事前の e ラーニングと対面学習を組み合わせたブレンド型学習が「教育界の破壊的イノベーション」などともてはやされる一方で、実際のところ、e ラーニングの実施には高いハードルがありました。ブレンド型学習を実施できるなら、どんなに素晴らしい学びが実現することかと夢想しつつも、ほとんどの教員にとっては「事前の動画視聴って、どうしたらいいんだろう」「そんな装置はないし」とため息をつくのが関の山でした。ところが、コロナ禍を経て、そうした状況は文字通り一変しました。その気になれば、「教育界の破壊的イノベーション」に手が届くようになったのです。</p> <p>第 13 回新任教員研修セミナーでは、デジタルに拡張された新たなアクティブ・ラーニング型授業のあり方を探ります。このことに対応して、より体験的にその方法を学ぶことができるように、新任教員研修セミナーは、実施方法を従来の 2 泊 3 日の合宿研修から、オンラインでの事前学習プラス 1 泊 2 日の合宿研修に生まれ変わります。オンラインと対面の良さを組み合わせ、参加者と講師陣が重ねる熱い対話の先には、まだ見ぬ未来の学びが姿を現わすことでしょう。</p> <p>大学セミナーハウスは、大学教員相互の交流を図ることによってわが国の大学教育の向上・発展に寄与することを目的としており、今年度も学術・文化・産業ネットワーク多摩との共催で国公私立大学の枠を越えた本セミナーを企画しました。</p>
運営委員・講師	<p><運営委員兼講師></p> <p>菊地滋夫 明星大学学長補佐・人文学部教授(委員長) 諏訪茂樹 東京女子医科大学統合教育学修センター准教授 福山佑樹 関西学院大学ライティングセンター教授 藤井恒人 東京農工大学グローバル教育院教授 田原真人 IAF JAPAN 理事、参加型社会学会理事、デジタルファシリテーター</p> <p><講師></p> <p>佐藤順子 SPA ファシリテーター 伏木田稚子 東京都立大学大学教育センター准教授 村山光子 明星大学発達支援研究センター</p>
定 員	40 名
参加者	<p>21 名(12 大学)</p> <p>国士舘大学(3 名)、駿河台大学(3 名)、大阪物療大学(2 名)、中央大学(2 名)、兵庫県立大学(2 名)、防衛大学校(2 名)、前橋工科大学(2 名)、沖縄県立看護大学(1 名)、江戸川大学(1 名)、敬愛大学(1 名)、上智大学(1 名)、明星大学(1 名)</p>
アンケート結果	<p>(回答 15 名)</p> <p>※ 満足 14 名 どちらかというと満足 1 名</p> <p>今回の新任教員研修セミナーを総合評価してください。 15 件の回答</p>  <p>● 満足している ● どちらかというと、満足している ● どちらかというと、不満である ● 不満である ● わからない</p>

事業名	第44回大学職員セミナー												
期日	2023年10月27日(金)～10月28日(土)												
主題	ジェンダー・セクシュアリティに関する大学のD&Iと環境整備 ー実例から考える課題と展望ー												
対象	主に大学職員												
趣旨	<p>皆さんの大学ではLGBTQの学生にどう向き合っているでしょうか。高等学校までの教育では、LGBTQをはじめとしたダイバーシティについて授業が持たれ、制服のジェンダーレス化も珍しいことではなくなってきました。そのような環境で過ごしてきた高校生が大学で学ぶ時代になった今、大学はどうあるべきでしょうか。</p> <p>私が今回のテーマに出会ったのは1枚のチラシからでした。当時キャリアセンターに在籍しており、課内の回覧文書に「レインボークロッシング」というLGBTQの学生を対象とした就職フォーラムの案内があり、虹色のデザインに目を引かれました。日程が空いており大学の近くの会場だったことから、深く考えずに参加しました。そこで知ったことは、自認の濃淡にもよりますが5%から15%の人がそのことで悩みを抱えていること、出展していた企業(多くが外資系)が様々な取り組みをしていることでした。私の大学は学生数が約2万人です。1000人から3000人の学生が悩みを抱えているかもしれないことを知り、驚くとともに私自身が業務として向き合えていないことを痛感しました。</p> <p>今年は日本でG7が開催されましたが、4月現在では先進7か国で唯一主催国がLGBTQの権利保障がない国として取り上げられています。一方、パートナーシップに関しては多くの自治体(市区町)が制度を持つようになってきました。また、機会をいただき全国の私立大学で就職指導を担当する職員、採用を担っている企業の人事担当者との懇談会で前述のフォーラム主催団体に講演をお願いしました。そこで知ったことは多くの大学がまた大学生を採用する企業がこの課題にどう取り組んだらよいか暗中模索である現実でした。日本国内の行政単位でも、また初等・中等・高等教育機関でも、この課題への様々な取り組みに温度差があることは今回のテーマの解決の困難さを物語っていると思います。</p> <p>本セミナーでは中央大学ダイバーシティセンター長島先生を中心として、複数大学で現場に携わっている方の取り組みを知ることができ、今回のテーマについてより深く学ぶ機会になると確信しています。LGBTQの悩みを抱え学生生活を送る学生に、大学職員として知ることにより少しでも寄り添うことができればと考え本セミナーを企画しました。今回のテーマを共に考え、様々な大学のグッドプラクティスを共有できれば幸いです。</p>												
企画委員・講師	<p><企画委員></p> <p>神山正之 立教大学入学センター<委員長></p> <p>青木加奈子 共愛学園前橋国際大学短期大学部事務局</p> <p>加藤毅 筑波大学教学マネジメント室高等教育研究部門准教授</p> <p>黒田絵里香 慶應義塾塾監局総務部課長・協生環境推進室事務長</p> <p>田中一平 法政大学学務部次長</p> <p>渡邊正樹 中央大学学事部企画課課長</p>												
定員	35名												
参加者	11名(11大学) 神奈川大学、慶應義塾大学、中央大学、津田塾大学、東洋大学、獨協大学、日本女子大学、法政大学、防衛大学校、武蔵大学、早稲田大学(各1名)												
アンケート結果	<p>(回答 9名) ※満足8名 わからない1名</p> <p>今回の「第44回大学職員セミナー」を総合評価してください。 9件の回答</p> <p>● 満足している ● どちらかというと、満足している ● どちらかというと、不満である ● 不満である ● わからない</p> <table border="1"> <caption>アンケート結果の割合</caption> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足している</td> <td>88.9%</td> </tr> <tr> <td>どちらかというと、満足している</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>どちらかというと、不満である</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>不満である</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>わからない</td> <td>11.1%</td> </tr> </tbody> </table>	評価	割合	満足している	88.9%	どちらかというと、満足している	0%	どちらかというと、不満である	0%	不満である	0%	わからない	11.1%
評価	割合												
満足している	88.9%												
どちらかというと、満足している	0%												
どちらかというと、不満である	0%												
不満である	0%												
わからない	11.1%												

事業名	古田武彦記念古代史セミナー2023(ハイブリッドセミナー)												
期日	2023年11月11日(土)～11月12日(日)												
主題	古田武彦記念古代史セミナー2023—倭国から日本国へ—												
対象	古代史に関心のある方ならどなたでも												
趣旨	<p>「古田武彦記念古代史セミナー」は、今回が6回目になります。近年のテーマは、卑弥呼の時代(3世紀)、倭の五王の時代(5世紀)、「日出づる処の天子」の時代(7世紀)と続き、今回は「倭国から日本国へ」をテーマにしました。</p> <p>「卑弥呼が何処にいたか」、「倭の五王が何処にいたか」、「日出づる処の天子が何処にいたか」などは、それが完全に解明できているか否かはともかくとして、客観的な議論が可能な設問です。</p> <p>それに対して、「倭国から日本国への移行は何時どの様に行われたか」は政治的要素を含む複雑な設問です。国際的に日本列島を代表していた国は、3世紀には倭国であり、8世紀には日本国であったことは客観的な事実(史実)ですが、倭国と日本国との関係については、「倭国の版図」、「日本国の誕生と版図」などまだまだ客観的には解明されていない難問が多く、今後の研究の進展が待たれます。このセミナーがその一助となることを願っています。</p> <p>物語として古代を語るのは夢がありこの上なく楽しいのですが、古代史学においては科学的な「史実」の解明が基本であり、その作業即ち「証明」は客観的且つ evidence-based でなければなりません。「それでも地球は回っている」は科学的ですが、「それでも邪馬台国は近畿にあった」は科学的ではありません。</p> <p>今回のセミナーでは「倭国」と「日本国」に焦点を合わせることにより、7～8世紀の真実の歴史に迫りたいと思います。セミナーは、『邪馬台国の滅亡 大和王権の征服戦争』(吉川弘文館2010)や『謎の九州王権』(祥伝社 2021)で知られる若井敏明先生の特別講演をお聴きした上で、古田先生の古代史学の研究方法と研究成果を再確認しながら、倭国から日本国への移行に関する evidence-based history について建設的な議論が盛り上がることを期待しています。そのために設定した2つのセッションは、講演とパネルディスカッション及び質疑応答を組み合わせる構成にしてみました。</p> <p>このセミナーは、研究者のみならず、古代史に関心を持つ全ての人を歓迎します。このセミナーが、若い人々が真実の古代を覗く窓になれば幸いです。</p> <p>このセミナーは、大学セミナーハウスと多元的古代研究会、東海古代研究会、東京古田会及び古田史学の会が共同で開催します</p>												
実行委員・講師	<p><実行委員> 荻上紘一(委員長)、大越邦生、大墨伸明、橘高修、西坂久和、畑田寿一、富川ケイ子、和田昌美 <特別講演講師> 若井 敏明(関西大学・神戸市外国語非常勤講師)</p>												
定員	60名												
参加者	58名(社会人:会場 36名 オンライン 22名)												
アンケート結果	<p>(回答 33名) ※満足 16名、どちらかという満足 13名、どちらかという不満 3名、わからない 1名</p> <p>今回の「古田武彦記念古代史セミナー2023」を総合評価してください。 33件の回答</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足している</td> <td>48.5%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという満足</td> <td>39.4%</td> </tr> <tr> <td>どちらかという不満</td> <td>9.1%</td> </tr> <tr> <td>不満である</td> <td>2.3%</td> </tr> <tr> <td>わからない</td> <td>0.7%</td> </tr> </tbody> </table>	評価	割合	満足している	48.5%	どちらかという満足	39.4%	どちらかという不満	9.1%	不満である	2.3%	わからない	0.7%
評価	割合												
満足している	48.5%												
どちらかという満足	39.4%												
どちらかという不満	9.1%												
不満である	2.3%												
わからない	0.7%												

事業名	憲法を学問するⅦ										
期 日	2023年11月25日(土)～11月26日(日)										
主 題	マイノリティVS個人? ～『国法学 — 人権原論』を批判する～										
対 象	大学生(大学院生を含む)及び社会人										
趣 旨	<p>今年の7月、最高裁は、戸籍上は男性だが女性として暮らすトランスジェンダーの経済産業省の職員が、執務場所に近い女性トイレの使用を禁止された事案について、当該処遇は違法だという判断を下し、宇賀克也補足意見は、性的マイノリティに対する理解の増進を怠った経産省に対して、「多様性を尊重する共生社会の実現に向けて職場環境を改善する取組が十分になされてきたとはいえない」、と指摘しました。</p> <p>これは、誰もが人間として有する一人ひとりの個性を、「個人の人権」として尊重したと考えるべきなのでしょうか。それとも、虐げられてきた性的マイノリティという「集団的属性」を、社会の多数派に対抗して尊重し、異質な少数者との共存を説いたと考えるべきなのでしょうか。近代立憲主義の結晶として知られるアメリカのバーネット判決は、宗教的マイノリティの保護を、「主知主義的個人主義と豊かな文化的多様性」の両立という観点から尊重しましたが、社会の分断が問題となるなか、「個人の尊厳」と「多様性の尊重」の予定調和に期待することは本当に可能なのが、問題となってきています。</p> <p>この、ごくごく身近な社会における分断は、それを不可視化してきた近代国民国家そのものを動揺させるのみならず、地球規模における人間社会の未来を左右しかねない問題構造をもっています。この論点を、「個人主義」と「文化多元主義」、「統合型」の国家と「多元型」の国家という、「二項対立型の思考」によって解明しようとしたのが、樋口陽一『国法学——人権総論』(有斐閣、2004年、補訂版2007年)でした。今回のセミナーでは、具体的な問題局面を念頭に、同書を批判的に検討することを通じて、問題の本質に迫りたいと思います。どうぞご期待ください。</p>										
企画委員・講師	<p><企画委員兼講師></p> <p>石川健治 東京大学法学部教授(委員長)</p> <p>蟻川恒正 日本大学大学院法務研究科教授</p> <p>宍戸常寿 東京大学法学部教授</p> <p>木村草太 東京都立大学法学系教授</p> <p><特別講義講師></p> <p>樋口陽一 東京大学・東北大学名誉教授</p>										
定 員	50名										
参加者	<p>学生7校16名、社会人13名 計29名</p> <p>※7校16名:東京大学(7名)、早稲田大学(3名)、一橋大学(2名)、慶應義塾大学(1名)中央大学(1名)、東京都立大学(1名)、摂南大学(1名)</p>										
アンケート結果	<p>(回答16名)</p> <p>※ 満足14名 どちらかという満足2名</p> <p>今回の「憲法を学問するⅦ」を総合評価してください。 16件の回答</p> <table border="1"> <caption>アンケート結果の割合</caption> <thead> <tr> <th>満足している</th> <th>どちらかという満足</th> <th>どちらかという不満</th> <th>不満である</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>87.5%</td> <td>12.5%</td> <td>0%</td> <td>0%</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足している	どちらかという満足	どちらかという不満	不満である	わからない	87.5%	12.5%	0%	0%	0%
満足している	どちらかという満足	どちらかという不満	不満である	わからない							
87.5%	12.5%	0%	0%	0%							

事業名	第11回 EU セミナー
期 日	2023年10月13日(金)～10月15日(日)
主 題	EUの戦略的自立と連帯
対 象	大学生(大学院生、留学生を含む)、高校生、社会人
趣 旨	<p>本年6月広島G7サミットの主要議題は、ウクライナ戦争と中国の影響力拡大への対応だった。EUはこうした世界的課題に独自の多角的な姿勢を模索しながら対応しようとしている。</p> <p>その姿勢の背景には2016年に発表した「EU グローバル戦略」の中の「戦略的自立」という概念がある。それは欧州統合の発展の証と自信を反映しているが、内外に向けた連帯強化の姿勢でもある。当初安全保障面を中心としたこの概念は今日経済・環境面など様々な分野にまで拡大している。本セミナーではこの戦略的自立概念の実態を多角的に議論する。</p>
企画委員・講師	<p><企画委員兼講師></p> <p>太田瑞希子 日本大学経済学部准教授 押村高 青山学院大学国際政治経済学部教授 小久保康之 東洋英和女学院大学国際社会学部教授 田中素香 中央大学経済研究所客員研究員・東北大学名誉教授 中西優美子 一橋大学大学院法学研究科教授 蓮見雄 立教大学経済学部教授 福田耕治 早稲田大学政治経済学術院教授 渡邊啓貴 帝京大学法学部教授・東京外国語大学名誉教授<委員長></p> <p><特別講演講師></p> <p>駐日欧州連合代表部公使・副代表 ハイツェ・ジューメルス</p>
定 員	60名
参加者	<p>7校 52名 社会人0名 合計52名</p> <p>※7大学52名:立教大学(19名)、帝京大学(17名)、日本大学(7名)、東洋英和女学院大学(5名) 早稲田大学(2名)、青山学院大学(1名)、一橋大学(1名)</p>
アンケート結果	<p>(回答13名)</p> <p>※満足7名、どちらかと言うと満足6名</p> <p>今回の「第11回EUセミナー」を総合評価してください。 13件の回答</p>  <p>● 満足している ● どちらかと言うと、満足している ● どちらかと言うと、不満である ● 不満である ● わからない</p>

事業名	世界の中の中国と日本—現代中国理解V												
期 日	2023年12月2日(土)~12月3日(日)												
主 題	内在的な中国理解に基づいて考える												
対 象	大学生(大学院生、留学生を含む)、高校生、社会人												
趣 旨	世界的にポストコロナの時代に入り、国家、地域、企業、個人などがそれぞれ原状回復を目指そうとしてもなかなかできず、それぞれが新たな着地点を見出すべく模索の中にいます。中国もその例外ではありません。習近平政権が3期目に入り、経済の回復、統治秩序の強化を目指しますが、そこにはコロナ前からありながらも、より深刻化した多くの問題が横たわっています。人口減少も予想より早く到来し、不動産市場もコロナ前には戻りません。また、コロナの感染拡大中に中国政府が採用した強硬な施策に対しては少なからぬ疑義が社会から惹起され、それがポストコロナの時期の統治に影響を与えています。対外関係の面でも、米中「競争」が激化するだけでなく、途上国・新興国との関係でもインドが台頭し、中国の立ち位置は難しくなっています。このような中国をまずは理解すること、特に中国の様々な主体がこの問題をいかに捉え、対処しようとしているのでしょうか。このセミナーではそれを政治、経済、社会、対外関係の面から考えます。それを踏まえて、日本の立ち位置、台湾問題を含めた東アジアの平和についても議論を深めていきましょう。												
企画委員・講師	<p><企画委員兼講師></p> <p>川島真 東京大学大学院総合文化研究科教授</p> <p>小嶋華津子 慶應義塾大学法学部教授</p> <p>金野純 学習院女子大学国際文化交流学部教授</p> <p>森路未央 大東文化大学外国語学部准教授</p>												
定 員	35名												
参加者	<p>9校 23名 社会人4名 合計27名</p> <p>※9校23名:学習院女子大学(10名)、東京大学(3名)、青山学院大学(2名)、慶應義塾大学(2名)、上智大学(2名)、日本女子大学、東洋大学、東洋英和女学院大学大学院、法政大学(各1名)</p>												
アンケート結果	<p>(回答12名)</p> <p>※満足11名、どちらかと言うと満足1名</p> <p>今回の「現代中国理解V」を総合評価してください。 12件の回答</p> <table border="1"> <caption>アンケート結果の割合</caption> <thead> <tr> <th>満足度</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足している</td> <td>91.7%</td> </tr> <tr> <td>どちらかと言うと、満足している</td> <td>8.3%</td> </tr> <tr> <td>どちらかと言うと、不満である</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>不満である</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>わからない</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	満足度	割合	満足している	91.7%	どちらかと言うと、満足している	8.3%	どちらかと言うと、不満である	0%	不満である	0%	わからない	0%
満足度	割合												
満足している	91.7%												
どちらかと言うと、満足している	8.3%												
どちらかと言うと、不満である	0%												
不満である	0%												
わからない	0%												

2023 年度事業報告 附属明細書 3 留学生会館入居状況

1. 2023 年 3 月 31 日現在入居状況

学校名	所属			計	性別	
	大学院生	学部生	教授		男性	女性
東京都立大学		9		9	8	1
東京工科大学		9		9	9	0
大東文化大学		1		1	1	0
合計		19		19	18	1

2. 国別留学生数

国名	計	大学院生	学部生	教授
フランス	9		9	
中国	2		2	
フィリピン	1		1	
ラオス	2		2	
スリランカ	1		1	
インドネシア	1		1	
ブラジル	1		1	
ネパール	1		1	
ベルギー	1		1	
合計	19		19	